

蝶の楽園

— 自然環境がキャンパスライフを豊かにする —

教育学部 川上紳一



岐阜大学に生息するコムラサキ。幼虫はシダレヤナギで育つ。手を差し出したら二匹のチョウが相次いで指先に止まった。

学生にとって大学はかけがえない青春を過ごす場所である。新しい学友との出会い、師や学問との出会いを通じて、人間形成がされていく。そうだとすると、どの大学で何を学ぶのかはその人の一生を決める大きな選択であることになる。最近になって、キャンパスの自然環境も若者の人間形成における重要な要素のひとつであることに気がついた。

そのきっかけは二〇〇四年に大阪府高槻市のJ T生命誌研究館で、顧問をされていた吉川寛先生との出会いにある。先生はそのころ夢中になっていた蝶と食草の関係に関する興味深い研究を熱く語り、研究館の屋上につくったΩ(オメガ)食草園というささやかな花壇に案内してくれた。蝶の幼虫が食べる食草は種類によって異なっており、いろいろな食草を植えておくと、周辺からチョウたちがやってくるというのだ。蝶と食草をテーマにした花壇をつくる取り組み自体がユニークな発想であり、それは理科教育におけるすばらしい教材にもなる。そう直感した私は、岐阜大学にも蝶の食草を植えた花壇をつくれなにかと思ひ活動し始めた。花壇が整備されてからはどんな蝶がやってくるのか気になり、一日に何度も足を運ぶようになった。そもそもどんな蝶が岐阜大学に生息しているのか。さらに蝶以外にもどんな生物が生息しているのか。これまで考えもしなかった疑問が次々にわいた。そして、みつけた生物を片っ端からデジタルカメラで

撮影し、生態画像やビデオ映像を集めた図鑑にして、理科教育のデジタルコンテンツにすることにした。これまでに確認した昆虫は約一八〇〇種類で画像の数も二万枚を超える。短い期間にこれだけの昆虫写真を集めることができたのは、岐阜大学周辺にまだ豊かな自然が残っていたからなのだろう。

こうした活動に刺激されてか、デジタルカメラで自然を撮影している学生や、生物の生態に興味を抱いている学生たちが集まってきた。意気投合したメンバーは、岐阜大学周辺だけでなく、西表島や小笠原諸島にまでいっしょに調査にかけ、珍しい生物たちとの出会いに感動し、野外で自然を探求することのすばらしさを体験した。身近な自然に目を向けることが学生たちにとって、日々の喜びになり、ひいては生きがいとなって、大学を卒業してからもデジタルカメラ自然観察を続けているという。

理数科や科学といった科目は難解そうにみえるが、身近なところから興味や関心を高め、一つ一つの解いていくことで、だんだんおもしろさがわかってくる。そうした体験をもっと多くの学生のみなさんに味わっていただけないのか。そのためのツールとして、キャンパスの自然環境を上手に活用できないかと日ごろから考えている。

キャンパスのデザインや景観もよくよく考えてみると、大学の個性を特徴づける重要な要素であり、教育研究における貴重な資源でもあったのだ。